

武庫川女子大学教育研究所／子ども発達科学研究センター 2020 年度活動報告

Progress Reports on
Mukogawa Women's University Center for The Study of Child Development 2020

河合 優年*・難波 久美子**・坂田 智美***
中井 昭夫*・石川 道子****・玉井 日出夫****

KAWAI, Masatoshi, NAMBA, Kumiko, SAKATA, Tomomi,
NAKAI, Akio, ISHIKAWA, Michiko, & TAMAI, Hideo

目次

- I. はじめに
- II. 2020年度の子ども発達科学研究センター
について
 - 1. 本年度の取り組みについて
 - 2. 外部資金の獲得について
 - 3. 次年度に向けて
- III. 研究業績

- * 武庫川女子大学教育研究所（子ども発達科学研究センター）・教授・研究員
- ** 武庫川女子大学教育研究所（子ども発達科学研究センター）・助手・研究員
- *** 武庫川女子大学教育研究所（子ども発達科学研究センター）・助手
- **** 武庫川女子大学教育研究所（子ども発達科学研究センター）・研究員
- ***** 武庫川女子大学・元教授

I. はじめに

2020年度は新型コロナウイルス感染症の感染予防のため、子ども発達科学研究センター（以下、子どもセンター）の研究活動は大幅に制限された。学外者の入構の制限により滞った活動や、対面状況を避けることができず実施できなかった活動があった。

具体的には、子どもセンターの中心的研究となっている、誕生時からの縦断的調査研究では、対面状況を避けることができないため、観察とインタビュー調査は中止された。子どもの発達状況や養育者との関係性を知る上で、直接話を聞くということは、調査項目以上の意味を持っており、この部分が欠落したことは大きな痛手であった。この時期に特異的に起きる進路決定などの保護者との葛藤を通した、子どもたちのアイデンティティ形成に関する情報が弱くなってしまった。

また、これまでに実施されてきた実験等のデータの整理、分析作業にも影響があった。特に前期では、分析を依頼していた学外者が学内に立ち入れない状況が続き、計画通りに分析作業は進んでいない。子どもセンターでの追跡データについては、発達心理学会においても、データ共有を通しての発達研究の活性化につながるものとして期待されているが、データブックの作成を含めて、当初計画通りに実行できていない。

地域貢献の取り組みである、保育士や保健師を対象とした子ども発達に関わる専門家を対象として実施してきた勉強会も開催を見送った。保育場面での子どもの行動を使って評価するという、新しい取り組みが大きく遅れている。

以上のように、子どもセンターの中心となる活動が制限を受けた一年であった。とはいえ、縦断研究のうち、パネル調査部分については、従来同様の郵送による調査を実施することができ、付加的に新型コロナウイルス感染症の影響に関する調査を実施した。これについては、発達心理学会、青年心理学会（いずれもオンライン開催）で結果報告を行った。また、一旦延期が決まった市民公開講座は、年度末にオンラインで開催することができた。

子どもセンターの理論的な枠組みであるダイナミックシステム理論については、科学研究費補助金による研究課題の分担者である、北海商科大学の玉井航太准教授、奈良教育大学の中山留美子准教授、本学共通教育の寺井朋子准教授がそれぞれ、「社会化の弁証法的モデル」「情動発達と意識」「過程・関係・関係 - 発達 - システム」として訳書を準備している。他に、ゴンザガ大学との、日米の中学性の生活実態調査の結果は、2021年6月にゴンザガ大学（アメリカ）で開催される、日米教員養成協議会（JUSTEC）において報告できるよう、準備が進められている。

このように、2020年度は新型コロナウイルス感染症の感染予防のため、計画通りに研究は遂行できていないが、オンライン等で実施できる研究活動に注力し、研究センターとしての機能は遂行できていたのではないかと考えている。

II. 2020年度の子ども発達科学研究センターについて

1. 本年度の取り組みについて

2020年度は以下のような研究活動と成果の地域還元および成果発表を行った。

(1) コホート研究

<概要>

本研究は、子どもセンターの中心事業として継続しているものである。今年度は、新型コロナウイルス感染症の感染予防のために、学校が臨時休校になった。この影響で、学校種を移行する学年（新中学1年生、新高校1年生）への春の適応調査は延期することになった。また、新型コロナウイルス感染症による臨時休校の影響を確認するため、追加調査を実施した。緊急事態宣言が解除される目途が立った5月末と、多くの学校が再開され、通常の授業となってから1か月以上経過したと思われる7月に郵送調査を実施した。3学期に実施しているパネル調査（中学3年生は11月）に関しては、例年通り実施した。また、対面による観察調査は、新型コロナウイルス感染症の感染予防に鑑み、実施を断念した。

なお、追加調査の結果の一部は、発達心理学会、青年心理学会（オンライン開催）において報告されている。

今年度は、調査対象者全員が中学生以上となり、青年期の調査となった。調査票の項目選定に当たり、青年期の項目選択については、引き続き中山留美子准教授、石井僚特任准教授（奈良教育大学）からアドバイス・提案を受けた。パネル調査とともに、青年期の自我の形成や、友人関係といった項目が含まれている。また、人を対象とする医学系研究に関する倫理指針に基づき、中学校等の課程を修了した協力者からは、インフォームドコンセントを受ける必要があるため、高校1年生向けの説明資料を用意し、保護者用の案内と同様の案内を作成、送付した。

協力者向けのニューズレターは、今年度も順調に発行できた。今回は、新型コロナウイルス感染症の影響を確認するために実施した調査結果の一部を紹介する記事を掲載した。また、今回も“To Junior Researcher～Dr. Masaの人間ウォッチング”を発刊した。第4回目となる今号は、感情をテーマに高校1年生に届けることができた。今後も中学生以降の対象児に対して順次送付する予定である。

中学校入学後、子どもたちからも質問や感想を受け付けており、それに対し直接回答が欲しい、ニューズレターでの一般的な回答が欲しい、という選択肢を設けている。今回も直接回答が欲しい、というケースがあったため、ケースカンファレンスを持ち、それぞれに回答を作成、本人宛親展にて送付している。

<すくすくコホート三重>

すくすくコホート三重では、中学3年生には、5月、7月に追加調査、11月にパネル

調査を実施した。また、高校1年生には5月、7月に追加調査、7月に適応調査、3学期にパネル調査を実施した。

<武庫川チャイルドスタディ>

同様の枠組みで西宮市内（開始当時）の追跡研究である武庫川チャイルドスタディでは、中学1年生には、5月、7月に追加調査、7月に適応調査、3学期にパネル調査を実施した。また、中学2年生には、5月、7月に追加調査、3学期にパネル調査を実施した。中学2年生の観察調査を計画していたが、新型コロナウイルス感染症の感染予防のため、大学構内への学外者の立ち入りが制限されていたため、予定していた夏休みの実施を見送った。その後の感染状況に鑑み、今年度の実施は断念した。

(2) 西宮市との「こころんサーモ」に関わる、チェック項目の策定とシステム構築

この取り組みは、西宮市教育委員会との連携の中で、小学校入学から中学校卒業までの9年間の一人ひとりの子どもの追跡可能性を検討しようとするものである。2020年度は、西宮市の教育ネットを使っての、オンライン調査への移行実験がなされた。

チェック項目の信頼性と妥当性に関するレポートを刊行し、内容についての外部評価を可能としている。2020年秋に出された、自殺統計において、子どもの自殺が増加傾向にあることから、文部科学省からも、このシステムの早期の導入が望まれている。このような社会的なニーズに対応するべく、システムのブラッシュアップを進めている。

(3) 子どもみんなプロジェクト

2015年度より開始された、大阪大学を基幹大学とした、弘前大学、千葉大学、浜松医科大学、金沢大学、福井大学、鳥取大学、兵庫教育大学、武庫川女子大学、中京大学の10大学コンソーシアム研究は、2020年2月に開催された、全体報告会を以って第一期を終了した。2020年4月より、千葉大学を基幹として第二期がスタートしている。

(4) 学院教育への還元および地域連携

研究成果の地域への還元として、これまで専門職者に対しての勉強会を実施してきたが、今年度は新型コロナウイルス感染症の感染予防のため、開催を断念した。これまでに勉強会で検討してきたチェックリストの完成に向けて、細部の調整を継続している。

(5) Light It Up Blue, MUKOJO! 2020

自閉症スペクトラム障害など神経発達障害に関して、発達障害者支援法や障害者差別解消法などの各法整備、特別支援教育や合理的配慮などが少しずつ進んでいるものの、社会における正しい理解や支援は十分とは言えない。国連により4月2日は世界自閉症啓発

デー、同日から1週間を発達障害啓発週間として、世界の170か国以上が参加する。本学でも2019年に第1回Light It Up Blue, MUKOJO!を学院80周年記念事業公募型採択事業として開催し、厚生労働省、文部科学省、国連など国内外と繋がるとともに、市民公開講座には多数の参加者があり、アンケート調査でも神経発達障害に関する啓発活動の継続に関するたくさんの要望の声を得た。

これらの多くの期待や要望に加え、文部科学省からの普及啓発の協力依頼も受け、2020年度は中井教授による特別経費「Light It Up Blue, MUKOJO!～発達障害をキーワードとした大学教育改革と地域社会貢献への基盤整備～」により引き続き継続して開催することとなった。4月2日の世界自閉症啓発デーから8日までの発達障害啓発週間、研究所棟においてブルーライトアップを行った。2020年4月18日(土)に開催を予定していた女子大学である本学にも深く関連する、女性の神経発達障害に関する市民公開講座「女性の発達障害～発達障害のある女性が一生を描ききるために必要なこと～」については、折からの新型コロナウイルス感染症の拡大により一旦延期とし、2021年3月28日(日)にオンラインによる開催とした。

これらのLight It Up Blue, MUKOJO!の実績は、文部科学省、厚生労働省に実施機関として登録され、LIUB JAPANのホームページにも掲載されること等を通じて、世界的にも認識されている。今後も本学が世界とつながり、また、地域に根ざす大学として神経発達障害に関する取り組みを積極的に行っているというステータスを国内外に継続的に発信していく必要がある。そのためには、将来的には本学院をあげての事業として行うことが望ましいが、その基盤構築のため、しばらくは特別経費にて教育研究所・大学院臨床教育学研究科・子ども発達科学研究センター主催として開催していく予定である。なお、2020年度はその全学的な取り組みへの第一歩として、武庫川女子大学・武庫川女子大学短期大学部FD推進委員会との共催として開催した。

2. 外部資金の獲得について

2020年度は科学研究費補助金(基盤研究(B))「コーホート研究による青年期における社会性の形成要因の解明と発達モデルの構築(課題番号:19H01759、2019年度～2021年度)」が継続されている。

3. 次年度に向けて

(1) コホート研究

科学研究費補助金を獲得し、次年度は3年目の活動となる。

2021年度の追跡調査は、すくすくコホート三重では、高校1年生には春の適応調査、1、2年生の協力者に3学期のパネル調査が行われる予定である。

武庫川チャイルドスタディでは、中学2、3年生のパネル調査が実施される予定である。中学生に対する観察調査は、新型コロナウイルス感染症の状況を見ながら、対策を講じて実施できると判断されれば、オンラインインタビューも含め、慎重に実施を検討する予定である。データセットの完成と論文を進める。紙媒体データ・電子データの整理を実施し、国内の共有データ資料として広く国内外へ公開する準備に入る。同時に、これまでに得られたデータをまとめる作業に入る。追跡調査も引き続き実施する。

(2) 児童生徒の学校適応

西宮市教育委員会との連携研究として進められてきた本研究は、公的な事業として、武庫川女子大学と西宮市との共同で実施されることになる。データの整理、フィードバック方法の検討、啓発的講演の開催などについて検討を進めている。

(3) 子どもみんなプロジェクト

2015年から始まった本プロジェクト第一期は終了したが、2020年度からは、千葉大学を事務局とする第二期事業が開始され、全国研究コンソーシアムが立ち上げられた。第二期においては、兵庫教育大学、兵庫県教育委員会との連携も計画されている。また、兵庫県での活動についても検討を開始する。

(4) 国際研究の展開について

ゴンザガ大学との、日米の中学性の生活実態調査の結果は、2021年6月にゴンザガ大学で開催される、日米教員養成協議会（JUSTEC）において報告する予定である。

今後、ゴンザガ大学、フリー大学（オランダ）との共同研究を積極的に展開し、100周年に向けた子ども研究を開始できるよう、検討していく予定である。

III. 研究業績（2020年）

<河合優年>

▶ 著書

- 1) 日本児童研究所（監）． 藤田博康・河合優年・内藤美加・斉藤こずゑ・高橋恵子・山祐嗣（編）（2020）． 児童心理学の進歩 2020年版（VOL.59） 金子書房

▶ 論文

- 1) 河合優年・難波久美子・中平真美・中井昭夫・石川道子・玉井日出夫（2020）． 武庫川女子大学教育研究所／子ども発達科学研究センター 2019年度活動報告． 武庫川女子大学教育研究所研究レポート， 50， 149-165.
- 2) 河合優年・高井弘弥・寺井朋子・坂田智美・大和一哉・佐々木理・谷口麻衣・星川雅俊

(2020). 心理的状态把握のためのチェックリスト開発 —10 大学連携共同研究「子どもみんなプロジェクト」西宮市における取り組み—. 臨床教育学研究, 26, 67-82.

<中井昭夫>

▶ 著書

1) 中井昭夫 (2020) 睡眠関連疾患 (不適切な睡眠衛生/概日リズム睡眠・覚醒障害群). 今日の小児治療指針 第 17 版, Pp.704-706. 医学書院, 東京.

▶ 論文

1) 中井昭夫 (2020) 不登校の影に潜む子どもの睡眠障害. 特集『子どもの睡眠と発達脳、そしてその障害』. 日本外来小児科学会雑誌「外来小児科」, 23:205-209.

2) 中井昭夫 (2020) 発達性協調運動症/発達性協調運動障害. 精神科治療学 増刊号「児童・青年期の精神疾患治療ハンドブック」
35(suppl) :143-147.

3) 中井昭夫 (2020) 常同運動症/常同運動障害. 精神科治療学 増刊号「児童・青年期の精神疾患治療ハンドブック」. 35(suppl) :197-200.

4) 中井昭夫 (2020) 小児神経発達障害における睡眠障害の治療の実際 - 自閉症スペクトラム障害とメラトニンについて -. Progress in Medicine 40:403-407.

5) 綿引清勝・澤江幸則・島田博祐・中井昭夫 (2020) 身体的不器用さを有する自閉スペクトラム症児の投動作における臨床的な特徴と介入効果について～投動作の質的な変化の違いに着目して～. 自閉症スペクトラム研究 17:59-67.

6) Nobusako S, Osumi M, Furukawa E, Nakai A, Maeda T, Morioka S. (2021) Increased visual bias in children with developmental coordination disorder: Evidence from a visual-tactile temporal order judgment task. Human Movement Science. 75: 102743.
<https://doi.org/10.1016/j.humov.2020.102743>

7) Nobusako S, Tsujimoto T, Sakai A, Shuto T, Hashimoto Y, Furukawa E, Osumia M, Nakai A, Maeda T, Morioka S. (2020) The time window for sense of agency in school-age children is different from that in young adults. Cognitive Development 54:100891
<https://doi.org/10.1016/j.cogdev.2020.100891>

8) Nobusako S, Osumi M, Hayashida K, Furukawa E, Nakai A, Maeda T, Morioka S. (2020) Altered sense of agency in children with developmental coordination disorder. Research in Developmental Disabilities. 107: 103794.
<https://doi.org/10.1016/j.ridd.2020.103794>

9) Miike T, Toyoura M, Tonooka S, Konishi Y, Oniki K, Saruwatari J, Tajima S, Kinoshita J, Nakai A, Kikuchi K. (2020) Neonatal irritable sleep-wake rhythm as a predictor of autism spectrum

disorders. *Neurobiology of Sleep and Circadian Rhythms* 9 :100053.

<https://doi.org/10.1016/j.nbscr.2020.100053>

- 10) Suyama S, Yagyu K, Araki A, Miyashita C, Itoh S, Minatoya M, Yamazaki K, Tamura N, Nakai A, Saito T, Kishi R. (2020) Risk factors for motor coordination problems in preschool-aged children. *Pediatric International*. 62:1177-1183. doi: 10.1111/ped.14275.
- 11) Nobusako S, Tsujimoto T, Sakai A, Shuto T, Furukawa E, Osumi M, Nakai A, Maeda T, Morioka S. (2020) Manual dexterity is not related to media viewing but is related to perceptual bias in school-age children. *Brain Science*. 10:100;
<https://doi.org/10.3390/brainsci10020100>

▶ 学会発表

- 1) 岡牧郎・中井昭夫・諸岡輝子・津島靖子・花岡義行・秋山麻里・小林勝弘 (2020) 協調運動の拙劣さを有する発達性ディスレクシア児の行動や情緒の問題について．第 62 回日本小児神経学会学術集会．(8月、オンライン)

▶ 講演

- 1) 中井昭夫 (2020) 睡眠からみた小児神経発達障害～自閉症スペクトラム障害の包括的時間治療～．岡山県小児科医会研修会．(11月、オンライン)
- 2) 中井昭夫 (2020) 子どもの睡眠障害の正しい理解に向けて～ICT依存にも触れて～．認定 NPO 法人 EDGE LSA(学習支援員)養成講座．(11月、オンライン)
- 3) 中井昭夫 (2021) 小児神経発達障害への睡眠からのアプローチ～自閉症スペクトラム障害の包括的時間治療～石川県小児睡眠研究会．(3月、オンライン)

<難波久美子>

- 1) 難波久美子・河合優年・田中滋己 (2020) COVID-19 による緊急事態宣言下における中学生の生活実態に関する調査報告—コミュニケーションを中心に—．青年心理学会第 28 回大会発表論文集, P.22. (12月、Web開催)
- 2) 難波久美子・河合優年・田中滋己 (2021) COVID-19 による緊急事態宣言下における中学生の生活実態に関する調査報告 2 生活の変化に対するストレスを中心に．日本発達心理学会第 32 回大会論文集, P.114. (3月、Web開催)